

五段

a 人はじめて法をもとむるとき、はるかに法の辺際を離却せり。

b 法すでおのれに正伝するとき、すみやかに本分人なり。

(一) 私釈

aは、人が初めて求法するときは、だれでも無条件に誤まる、と聴こえる。たしかに主語としての人が、法を目的として求める以外に法を求めようがなく、それは二段aで説かれたように迷であるほかない。△おほよそ初心の情量は、仏道をはからふことあたはず▽（溪声山色）といわれる通りだ。もちろん、求法そのものが否定されているわけではなく、人の求法の営みの初めはそうであるほかなく、錯倒はそこに不可避的に纏い付くある種の必然として示されている。このことは、これまで二段四段の私釈でも明らかにしてきた通りである。

△はるかに・・離却せり▽とは、その錯倒が方向の逆であつて、一応目的とされている悟りまではまだはるか遠い、というような同方向の遠近ではないのである。かえつて進めば進むほど離れていくのであり、それが△はるかに▽と形容されているのだろう。

それに対し、bの△すみやかに▽は時間的速さを超えた、現にある事態（本分）の顕現を形容する早さといえる。しか

し、それは常にもとと有る、ということではない。その前の条件、△法すでおのれに正伝するとき▽を見落とすことはできない。

△法すでおのれに正伝する▽、その△とき▽は、前段でみたように、打坐の時にほかならない。△すでに▽とは、坐禪修行して次第に本分人になるのではなく、すでにある電波に受信機の波長が合うように、坐禪のとき、即時に△本分人▽なのである。

「坐即不為也。是即自己ノ正体也」（『隨聞記』三の十八）といわれる通りである。その△とき▽を無視するとおおきく誤る。うっかりすると『普勸坐禪儀』に「道もと円通、いかでか修証をからむ」とあり、また『弁道話』に「この法は人人の分上に豊かにそなわれり」とあることから、いつでも人にさとりが備わっている（本覚）と思われがちである。しかし、△仏性は成仏よりさきに具足せるにあらず、成仏よりのちに具足するなり▽（△仏性）と言明されている。したがって、さとり（法）も、「いまだ修せざるにはあらはれず、証せざるにはうるることなし」（『弁道話』）と言いつけられるのである。もちろんその修証は自己を運ぶのではなく、△法▽が主語になって、△おのれに正伝する▽のである。そこを人間の側から言えば、「退歩を学すべし」（『普勸坐禪儀』）ということになる。

さて、△正伝▽といっても、なにか特別な真理を伝えられることではない。仏法はなにか把握できる対象としての真理ではなく、人の生き方なのだから、△法が伝わるということも、伝えるべき「もの」があるわけではない。そういう意味で、△正伝は自己より自己へ正伝す▽（△仏教）ともいえる。同様に、△本分人▽とは、悟りがなにか特別な体験で得られるものではなく、自分がもともとそうである真実な自分になることを表している。

しかしながら、重ねて言えば、「眼横鼻直なるを得」（『永平広録』）などから連想して、人は本来悟っていたのだと早

合点すべきではない。△本分人▽とはそれほど簡単なことではない。自意識のこのわれではなく、△非思量にたれあり、たれわれを保任す▽（坐禅感）いわれる△たれ▽、すなわち自分が意識し自覚する私でないものこそ本分人であり、それは只管打坐の時節にのみ現成するといえる。

「安心」はこの段bを適確に解釈している。

「我々のこの尽十方界真実人体、これが正法です。宇宙全体の真実が正法ですから、正法に形はない。感覚はない。つまり自己が自己に正伝するという事は、本来の自己を正しく修行する。これが本当の正伝です。物を貰うことじゃないですよ。」

「『法すでおのれに正伝するとき』ということは、坐禅するより他に道はありません」。『本来人というのは、坐禅した時が本来人、本来人というのは、万法に証されている自分だ』。

これを読むと、どうして二段であるような解釈がでてくるのか不思議である。

(二) 宗門解釈批判

宗門のこの段の解釈は、それらが本覚思想にほかならないことを明瞭に示している。

『御聴書』は△法の辺際を離却せり▽について、「法を求めるといふ道理あるべからざるところをさして求もとむの詞ことばをはなるとも云ふべし」という。まず、法を求めるといふ求道の根本が「求む」も「離る」も同じことだとませ返されて、否定されてしまうのである。

これを『御抄』は「只本覚の理ただなんと云程いふほど義也」と受け取る。

そしてまた『聞解』は「本より法の中に在り乍ら、法をもとめるぢやから・・・取て返し、おのれに正伝する時、本分本よりあたりまいの人で法を求むるに及ばず」とそれを敷衍する。これらの解釈のどこにも、坐禪も行もない。坐禪に言及しないなら、ただ、あたりまえの人のままでいい、法は求めなくても、もともとあるのだからそれでいい、ということにしかならない。そこからは無事禪しか生まれぬ。

『那一宝』は、「所求しよくのしん心有るときは、法に於て遠くして遠し。求心や歎む時自己より自己へ正伝す」という。本文の文意にはあっているようだ。ただ、求める心がなくなれば、法が正伝するということはあり得ない。求める心をやめて打坐してはじめて正伝するのだ。だからこそ、修行していく中で、そのことに気付く、ということがあり得る。ひとたび修行の契機を欠落させれば、けつきよくは本覚思想にならざるをえない。

『味わう』は、「生命実物」を、今度は「御いのち」といいかえ、キリスト教の神の御力と同じものだとする。そしてこの段を「本当はもはやわれわれ仏法の中にどっぷり生きていたのであって、決して外側へ向かつて求めようがないのであり、そういう『御いのち』を事実自分は生きているのだということがコソツと『おのれに正伝するとき、すみやかに、本分人なり』なのです」とまとめる。コソツと正伝するとは、内容からいつて大きな力に生かされていることが分かるというほどのことである。それでは一般的宗教論と変わるところはない。「修をはなれぬ証を染汚せざらしめんがために、仏祖しきりに修行のゆるくすべからざるとおしふ」（『弁道話』）と、明記されているのに、修行ぬきで、「生命の実物に目覚める」などと一般的宗教心の説教にしまっなっていいものだろうか。

『安心』は、aについては、法が把握不可能ということを書いていて、「そこで私達には法の求め方が、無所得無

所悟の坐禅をすることです」と、説いている。宗門の他の釈とは異なつて、法を求めること自体を否定することはないが、求道のはじめは誤るといふ一文の要点がここでは押えられていない。

(三) 公案禪の解釈批判

『弁註』は「正伝は自己より自己に正伝すれば元是旧時人、眼横鼻直の面目を改変するなき本分のひとなり」といふ。ここには坐禅における実存転換は述べられず、本覚門的解釈である。

『参究』は、伝統的宗門の本覚門的傾向を批判する。いちおう『弁註』と同じく「衆生本来仏」であることを認めたいうえで、だが「衆生は本来仏だということを知っている凡夫は一人もないよ」と言つて、そのことに「目をさまさねばならぬ」ことを強調する。そして「悟るための手段として坐禅をもちいても、けつして悪いことじゃない」と、見性禪の立場を露呈している。これは知つても知らなくても仏だ、とする宗門の本覚門的解釈に対し、それに目覚めねばならぬという始覚門的解釈であるといえる。道元はそのどちらでもない。そのままではなく、目覚めねばならぬのではなく、行（修）においてあらわさ（証）なければならぬとするのである。その証は、この私において行じられはするが、△本分人▽であるとは、私の自覚の事柄ではなく、諸仏でさえ覚知しないことなのである。

また「法を求めるのは本分上からはまちがいが」と、ここは宗門の解釈をいちおう認めて、さらに「このまちがいは、ことさら知つて犯さねばならないまちがいだ」といふ。それは始覚門的解釈だからそうなるのであろう。けれども道元はけつして法を求めのがまちがいだとはいふまい。法を求める方向が不可避的にまちがいだといふのである。「ことさら

知って犯す」と不可避とは違う。

(四) 哲学的新解釈批判

いちばん単純な常識に合わせた解釈がここではなされる。たとえば『解説』は、「求める立場に立っているときは法と自己とが離脱しているが、法が自己に正伝していると自覚しえたときの自己は法と一体であり、それが本来の自己である」という。最初は法と自己が離れていて、悟れば一体であるといっているまでである。

『講話』は「すみやかにと言うのは七面倒臭いことなしに、色を見、声を聴く、それでいいということです」という。結局、ありのまま肯定の自然外道と同じ事ではなからうか。